

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年9月6日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02190

研究課題名(和文) 反ユダヤ主義批判の非寛容批判 ユダヤ人演劇人G. タボリの場合

研究課題名(英文) Antisemitismus in neuer Sicht

研究代表者

須永 恒雄 (Sunaga, Tsuneo)

明治大学・法学部・専任教授

研究者番号：70106590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：先ず《我が闘争》について、シオニズムの主催者の名を騙るかのごときヘルツルが未だヒトラーになる以前のヒトラーを手厚くもてなすが、機密書類「我が闘争」をめぐって忘恩の憂き目を見る、ファルスすなわち笑劇と副題を添えられたこの戯曲の、換骨奪胎の妙味とそれの齎す一切の価値転換の模様を調べた。《白男と赤顔》には、精神身体障害の娘とその父とが、持物を略奪され、唯々諾々とむしるすすんで譲渡する、無際限の寛大、通念を逸脱する価値転換が確認できた。《M》では、障害者俳優ラトケを中心にタボリのまさに融通無碍な芝居作りの現場に、監督と俳優たちとの垣を超えたあるいは双方向の共同作業の実態にタボリの真骨頂を見る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昨今の差別撤廃の流れが表面上は一般化しながら実態は主として市場原理の主義による判断基準の単純化固定化が蔓延する中、ナチスの大量虐殺の被害者の立場を活かしつつ被差別側の視点から、またその弱者の視点をも相対化する融通無碍の視点から、様々な剣呑な素材を舞台上に展開するG. タボリの演劇は極めて時宜に適した衝撃を与え得る。即ちヒトラーにも糾弾される正面のみならず側面の奥行きを探り、また障害者を展覧に供することで美の新たな局面を拓く。主客の固定した関係を見直し、諸変化を閱する主体の所在を開示する、これは甚だアクチュアルな観点を与え得る稀有の演劇人である。

研究成果の概要(英文)：“Mein Kampf”, a Tabori Version of the notorious work with a subtitle “a falce”, which suggests a subtl difference of from the conventional common sence; here appears Hitler not yet as an incarnation of evil, but as an a little childish youngling, looked after especially by jews. A splendid conversion of all values. “Weisman und Rotgesicht”, another case of the same theme; a man with a daughter with a mental disease is completely robbed of his property. nevertheless he gives willingly all what he has. An extraordinarily generosity: a evidence of a absolute freedom of the compulsion of the value complex. “M”, another version of the classical piece; a physically handicaped person is is put into the center of the stage, though normally he stays discreetly behind the pair of parents. A whole turning of the frame of reference and this indicates the deep insight of this theater maker, so as Tabori calls himself.

研究分野：芸術学・独逸文学

キーワード：差別被差別 タブー ヒトラー 反ユダヤ主義 反市場原理 障害者 性差別 精神病

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

戦後ドイツに於ける、ナチスによるホロコーストへの反省は徹底して貫徹実行されて、いわゆる旧悪を暴くに熱心すぎるほどであったが、そこから黒白の酷薄なほどの分別と断罪が生じて、その分断はときとしていまひとつたび、かつて犯された罪悪に等しい強度を帯びるかの趣さえ呈することがないとはいえないほどとなった。即ち、犯された犯罪をあくまで暴き立てて断罪し被害者に謝罪することの極限が、ここに新たな不寛容を齎しかねないとするみえたのである。

かねてから注目していた、ヒトラーを主題とする映画の作者、H.J.ズィーバーベルクへの過剰且つ一方的な反応の例に触発されてこの状況を考察する必要性を痛感した。

### 2. 研究の目的

ヒトラーをナチスの蛮行の元凶と看做し断罪の対象とするのみでは、ホロコーストの信じ難い凶行は、ひたすら希代の悪事としてのみ留まり、不可解な偶発事に留まるばかりであろう。先に触れた映画の作者は、タブーに触れたことで断罪の憂き目にあったが、とりもなおさずタブーとすることはこの大罪を恰も封印するばかりで、その解明の道を閉ざすことにほかならない。

そこへ G.タボリが差し出した奇想天外のヒトラー芝居は、被害者と加害者の線引きの彼岸に浮かび上がった絶妙な、またおそらく他を以て代え難い妙案として、この難題に有効な一突きを与えた。即ち、ホロコーストの元凶として罪の権化の如きヒトラーを、そのファッサード(正面)ならぬプロフィール(側面)から照射する試みであった。

ヒトラーもまた一人の人間であった、とは、ドイツ人というものはない、一人一人の各個人としてのドイツ人があるのみだ、というタボリ自身の言葉のこれは言い換えといってもよい。すなわち《我が闘争》と題されたこの戯曲は、ヒトラーの書物の名を借りてそれを換骨奪胎、一個の人間としての、つまりは一個の人間としての、あるいはそうであったこともあるヒトラーを俎上に載せる。ヒトラーが未だヒトラーになる前、すなわち符牒と、悪の権化の符牒と成り果てる前のヒトラーを観客の眼前に曝すことで、ヒトラーを体感させる、とは即ち、とりもなおさず、観客として傍観している一人一人がヒトラーを体感する素地を内在していることに思いを誘うことにほかならない。

この観点は、ヒトラーのみならず、およそ生きとし生ける小さな者、アレクシエーヴィチ言うところの、小さな者たちすべてを素材として展開し得るが、まさにタボリの登場人物はなべてそのような取るに足りない、というより、まさに足りない者たちではないか。

このような善悪と高下の価値転換の可能性を、タボリの作品を辿りながら確認してみたいと考え、これを研究目的としてみた。

### 3. 研究の方法

まずは G.タボリの戯曲《我が闘争》をはじめとして、上述の観点に沿って、具体的詳細を点検した。

次に、「小さき者」すなわち被差別者、被災者、マイノリティーの一例として、《白男と赤顔》について、持物一切を奪われるというより進んで贈物にしてしまう男と、不具の娘と、また奪う側のこれまた報われない人生を経た男など、いずれも何らかの意味での弱者であり局外者である登場人物を点検した。

第3番目には、「小さき者」のとりあえず最後の例として、《M》に、殺害される子供役として障害者俳優の P.ラトケを登場させたことについて点検した。

かかる弱者の視点への配慮、というよりむしろまさにその者自体の視点から成り立つタボリ

の劇作品は、テキストのみならず、その舞台づくりにもその零点に位置する視点から開始される。即ち上から中心からの管理によるのは正反対に俳優各人の自発性を待ってその演出は自然発生的に生まれ、舞台へと成就される。その機微をつぶさに観察した体験をオーストリア放送局の文化担当記者から伝え聞く折に偶々恵まれたことは有益な体験であった。

以上、タボリの作品の具体的事例に即した点検確認作業のほか、A.クビーンの画業の多くを占める、異形の形象を、同様の文脈から調べてみた。

同じ関連から、ウィーン近傍の精神病者への芸術療法の施設「グッキング芸術家の家」を訪問して、その解放治療の様子と成果としての展示作品を観察した。

#### 4．研究成果

第一に、《我が闘争》について確認したことを以下に記す。

狂言回しを引き受ける、シオニズムの主催者の名を騙るかのごときヘルツルと、またその相棒とも言うべきこれまたそのかみの著名は貴族の名を名乗り且つ又自らモーゼであると妄想するロプコヴィッツ、また、ヒムラーの名を形容詞の比較級と見立て、それを一段アップした最高級を名乗るヒトラーの側近の、大量虐殺ならぬ、雌鳥料理の手並みを、料理番組として展覧に供する場面、等々、ファルスすなわち笑劇と副題を添えられたこの戯曲の、換骨奪胎の妙味とそれの齎す一切の価値転換の模様を調べてみた。

次の《白男と赤顔》では、前半の幾つかの場面をとりあげて、寄る辺ない父と精神身体障害の娘が、次々と持物を略奪され、それも唯々諾々とむしろすすんで譲渡するかのごときなりゆきに、どこまでもきりなく寛大な態度の、初めは見る者を呆れさせ、歯痒がらせるものの、次第に無一物に近づく態度の悠々迫らぬ姿に引き込まれてゆく過程を確認した。これまた目には目をの等価の遣り取り、すなわち復讐や等価交換経済原則をこえた、通念を逸脱する価値転換が確認できた。

《M》では、舞台の成立過程、さらに遡っては作者タボリとの出会いを語り、その独特の練習風景の貴重な記録である、ラトケの書物を手がかりに、タボリのまさに融通無碍な芝居作りの現場に、すでにそこに現れている監督と俳優たちとの垣を超えたあるいは双方向の共同作業の実態を見る想いがした。

因みに、タボリの舞台製作の現場に立ち会ったことのあるオーストリア放送局の G.ツインマン氏からその現場の話を伺う機会を得たことはウィーン出張の成果であった。

タボリにはアメリカ時代に培った独特の身体論的芝居製作の方法論があるが、それについてもまた在来の力学を見直す観点を提供するものとして、つまりはより寛やかな価値観に基づくものとして今後の調査対象にしたい。

#### 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

1．久遠の憧憬 単著 平成28年3月 教養論集(明治大学)(515),39-53頁(明治大学教養論集刊行会)

2．言葉「と」音 単著 平成28年3月 教養論集(明治大学)(516),1-14頁(明治大学教養論集刊行会)

3．語り手カフカ - 病像の発現するとき 単著 平成28年3月 教養論集

( 明治大学 ) ( 517 ), 5-17 頁 ( 明治大学教養論集刊行会 )

4 . 自然と人事 単著 平成 29 年 3 月 明治大学教養論集 ( 524 ), 1-21 頁 ( 明治大学教養論集刊行会 )

5 . 「眼の光」 ヴァルター・ゲール頌 単著 平成 29 年 9 月 ( 526 ), 65-81 頁 107  
" 匍匐前進 寛やかなうごき " 単著 平成 29 年 9 月 ( 525 ), 17-27 頁 ( 明治大学教養論集刊行会 )

6 . " 瓢箪から駒、もしくは反転する舞台 "

単著 平成 30 年 9 月 " 明治大学教養論集 534 ( 2018 ・ 9 ) ", 13-38 頁

7 . " ウィーン三態 三つの奇観： タボリ、シュティフター、ブルックナー "

単著 平成 31 年 3 月 " 明治大学教養論集 ( 539 ) ( 明治大学教養論集刊行会 ) ", 1-35 頁

8 . 108 " Einwanderer in Wien aus der Ferne und aus der Nähe - Johannes Brahms, Theodor Billroth, Eduard Hanslick und Anton Bruckner "

単著 平成 30 " Beiträge zur Japanologie 47 " ( Universität Wien ) ", 153-172 頁

( 図書 ) ( 計 3 件 )

1 . 東欧の想像力 共著 平成 28 年 2 月 ( 松籟社 ) 沼野 充義ほかと共同執筆

2 . Wort wird Bild ( Josef Linschinger ) 共著 平成 28 年 8 月 " ( Verlag Bibliothek der Provinz ) "

Josef Linschinger との共どう執筆

3 . スイス文学・芸術論集 小さな国の多様な世界 共著 平成 29 年 5 月 ( 鳥影社 )